



質疑応答

質問▼時代の濁りが劫濁だとお聞きさしました。最近日本や世界の状況、また国の体制がズレてきていると感じます。「五濁の時機」あたりでは「和讃の中」にどの様に読み取ればいいのか。

訓覇▼この和讃は、「道俗ともにあらそいて」と続きます。道俗、つまり僧侶も僧侶でない方も「あらそう」事に終始しているのです。そして、お念仏の教えを大切にする人を「疑謗破滅さかりなり」と、そのあり方を否定して、念仏者を疑い破滅させていくというあり方です。今、世の中では新しい差別が起こ

り、不安に揺れ、人に對する排除の心や極端な攻撃が起こっています。これも濁りです。でもそれはその人が悪いからというより、そういうようなものを起こさせる時代社会、そこに劫濁という濁りがあるのです。そこから見

ます。顛倒というのは、少しズレているのではなく、逆さまである相です。例えば重ねた本が少しズレているとすぐに気付きますが、完全に逆さまになっていると、上下のズレにも気付かなくなってしまう事を言うのです。つまり顛倒してしまっていると、濁がみえなくなるのではなく、濁を濁と認識できなくなるのです。「濁が見えない」と、「濁と見えない」

のは全く違う。こんな悲しい私たちのあり方が、一番恐ろしい事ですと、このご和讃は仰っているのだと思います。

しんらん講座に参加して みんなの声



▼聞法の場合はありますが、確かに談合の場合がありませんね。話す事によって何が知らされ、破られていくのか

▼「双方向参加型の講座を目指して」と言う事に賛成します。多くの研修会は聞いて終わりになっていて、参加者は受け身の立場になりがちです。一方向だと主催者にとつて運営は楽かもしれないが、

聞いて分かった事にしたり、話の良し悪しを論じるなど、参加者が評論家になってしまいます。主催者も参加者も、仏法の前ではみんな(私)が当事者(主体)となります。予め整った場があつて、そこへお客さんの様に参加するのでなく、当事者として加わる事で、その場がやつと整えられるのでしよう。

▼「対話が生まれ、学びが深まる」とお聞きしました。それについて、真宗における「学び」とはどういう事か、それを「深める」とはどういう事かについて、知識が広がるのか、何かが身に付くとか、豊かになるとか、不安が消えるとか、あらゆる方向に行つてしまいうになるので、改めて説明してくださると有難いです。



編集委員のひとひ

編集会議では、みんなで訓覇先生のご講話を振り返りました。また、皆様方からいただいたアンケートや講話中の質疑内容について全員で読み合い、「しんらん講座だより」と次回講座に効果的に反映させていただこうと協議いたしました。

本講座を通して「五濁ノ時機」を共に生きる御同朋の皆様方との対話が深まりますことを願っています。(S)

次回開催予定
4月20日(火)
14時
会場 五村別院



VOL.1

発行所：長浜・五村別院
長浜市元浜町32-9
代表者 宮戸 弘
編集：両別院教化推進委員会
お問い合わせ：
長浜：0749(62)0054
五村：0749(73)3133
FAX：0749(62)0754
MAIL：shinran.lect@gmail.com



第一講要約

只今ご紹介いただきました三重県菟野町の金藏寺の住職をしております。住職になる前は、本山の解放運動推進本部で、足かけ二十五年間仕事をさせていただきました。現在は、その時いただいた課題に引き続き関わらせてもらいながら、そこで学んだ事を、ご同行の方とどう学びなおしていける

かが、新たな大きな課題となつております。

講座の願い

今回の「しんらん講座」は、どういう講座にしていくのかというところから、スタツフの方と一緒にご考えさせていただきました。

その課程で一番大切にしていきたいと共有されたのが、「双方向参加型の講座」という事です。その事は、ご輪番がご挨拶の中でも語っておられる「これまでは、講師のお話を聞く事が中心でしたが、今年度は参加者の声を講師にお届けし、そ

の声に対する講師の見解をお伺いする事で、参加者と講師との対話が生まれ、対話を通して学びを深めるような講座になる事を願いとしています

という言葉を集約されていると思います。双方向参加型学習というのは、こういう大人数の講座ではなかなか難しいのですが、私もこの「対話」ということを強く意識してこの講座に関わらせていただきたく思います。それから、この対話の一環としてアンケートを書いてもらうという事があります。お話を聞いていただいて何か感じてい

ただいた事があるなら、それを感じたままにしておくのではなく、一言でもいいので自分の言葉にしてみる、その事が学びにおいてとても大事なのではないのでしょうか。そして、連続講座ですから、そのアンケートを私やスタツフも受け止めさせてもらい、次回の講座に生かさせていただくという事を大事にしていきたいと思つております。

①テーマについて

時代社会の濁り 「劫濁」

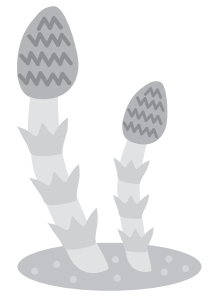
今回の講座でテーマにさせていただきましたのが、親鸞聖人の『正像末和讃』にあります、

五濁ノ時機イタリテハ 道俗トモニアラソイテ 念仏信ズルヒトヲミテ 疑謗破滅サカリナリ

というご和讃です。

その思いについては講師メッセージ(ポスター等に記載)にて、新型コロナウイルス感染拡大の中「ウイルスより人の目が怖い」という顛倒した社会状況が生み出されてきています。仏さまはこのような世の中の有り様を「濁」と言い当てられ、この濁世を人として生きよと強い願いをかけられます。様々な「不安」が人々の心を覆う今こそ、人間が人間であるために、どう生きるのかを、教えに聞きひらいていきたいと思ひます。

と表現いたしましたので、あらためてご覧いただきたいと思ひます。



新型コロナウイルス

感染拡大

その時にまず向き合っていないかなければならないのが、「濁」と言われる現実です。

具体的には、今日の新型コロナウイルス感染拡大がもたらす社会の濁りです。新型コロナウイルスによって生命の危機にさらされるという事はもちろんですが、この間、ウイルスの感染拡大とともに生み出され広がっていったのが、「コロナ差別」という「病」に関わる新しい差別です。私の地域でも、感染者が確認されたと報道されると、個人や住居が特定され、本人や家族の職場、行動履歴までがネット上などで拡散されました。そこには感染したことを非難し責任を追及する書き込みがあふれ、その家に対する投石や誹謗の落書きなど

にもつながりました。

未知のウイルスや生活に対する危機感、不安感が増大する中、「自粛警察」という言葉が表すとおり、正義感が絶対化され、それは攻撃的な排除の感情、行動となって、病を得た人や家族、さらには医療従事者にも向けられました。自らの行動が正当化された、加害意識のない新たな病者差別が生み出され、異論をさむ事を許さない「同調圧力」は、「ウイルスよりの目が怖い」という顛倒した社会を形成していききました。私たち市民一人ひとりが無自覚の内に、病を得た人に「病とは別の苦しみ」を与える、差別加害者となっていくのです。まさしく時代社会の濁りが、そこに生きる者に様々な濁りを生み出していったと言えるのではないのでしょうか。

今回のテーマの根底には、このような時代社会

に人としてどう向き合っていくのかという、教えからの大きな問いかけがあると思っております。

まさしく、このコロナ下で生きるという事そのものが宗教的課題、そして信心の課題として問われているのだと思います。

② 宗教とは何か

信心とは何か

清澤満之先生

三つの言葉

その信心、宗教という事ですが、信心とは何か、宗教とは何かと仮にいまここで皆さまにお尋ねしても、五十人おられたら五十通りのお答えが返ってくると思います。そこで今回のテーマを強く意識したところで、宗教とは、信心とは、という事を確かめる大きな手がかりになるであろう、真宗大谷派における近代教学の基礎を築かれた清澤満之先生の三つの言葉をご紹介いたします。

▼宗教とは、人心をしてその根帯を自覚せしむるものなり。

「信仰の余歴・序」

▼吾人が吾人の根本的成立を自覚するもの、之を是れ宗教の信仰と云う

「宗教は目前にあり」

▼パンの為、職責の為、人道の為、国家の為、富国強兵の為に、功名栄華の為に宗教あるにはあらざるなり。人心の至奥より出する至盛の要求の為に宗教あるなり。宗教を求むべし、宗教は求むるところなし。

「御進講覚書」

という言葉ですが、私は

この言葉から宗教というものを考えていくという事を、十年前にお亡くなりになった廣瀬杲先生から教わりました。先生が仰っていた事も思い起こしつつ、この言葉に向き合いたいと思います。

根帯の自覚

まず一つ目の言葉からですが、「根帯」というのは「根」と「帯」です。植物は、一つの根を大地に張って生育するわけで、そこからナスならナスという実がなります。その実が木と繋がっているところが帯です。一つの実は、帯でほかの実と繋がりが、根と繋がっているのです。同じ形をした実は一つもない、けれど形が違うからといって、ナスと言えないのかというよりはナスです。どこでナスといえるかという、帯のところ一つ

の木とくつつき、同じ根で大地と繋がりに、いのちを育んでいるからです。つまり、宗教とは何かという、廣瀬先生の言葉をそのままお伝えしますと「われわれ人間が、お互いに命を共同しながら生き合っている。その生き合っている平等にして根源的な連帯を自覚する事」という事になります。人間にとつての、目に見えない「根」と「帯」を明らかにするということではないでしょうか。

根本的成立の自覚

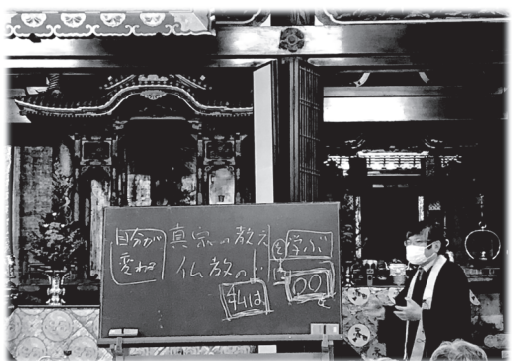
次は、私が私であるという事を根本的に成り立たしめている事実への目覚めという言葉です。

私はどこで私と言えるのか、私はどこから来てどこへ行くのか、もしかしたらここに「宿業」という大きな問題が繋がってくるのかもしれない。

本当の願いの自覚

そして最後の言葉ですが、ここであげられている一つひとつは、人間の諸要求、人間社会の要求全てを言い当てていると思います。そしてその様な要求に対して答えるものが宗教ではないのだと言われます。廣瀬先生は、この言葉を「人間を最も積極的に人間たらしめる要求に応答するもののみ宗教というのだ。だから、人間は、宗教を求めなくては人間になれない。だからといって、宗教は、何事かを求める材料ではないと言い切っていくわけです」と押さえられております。

皆さまいかがでしょうか。皆さまの中の、宗教とか信心とかいうイメージと重なりましたか。私は、ここでの宗教とは何かという確かめ



③ 五濁とは

「五濁」

最後に簡単に「五濁」について触れさせていただけます。まず、この「五濁」という言葉は、お聖教として大事な言葉なのですけれども、特に「阿弥陀経」の中に五濁が説かれているところに大きな意味があると教えられました。

「阿弥陀経」というお経は、釈尊の出世本懐をあきらかにする教え、と言われています。そこにこそ「五濁」という事が明らかにされなければならなかったという事です。さてその五濁ですが、一つ目が「劫濁」です。これは人間が人間として生きていくことが困難になるような時代社会の「濁」です。次に「見濁」とは、邪悪な思想や見解という事でしようが、自分の考えが間違っていないと固執したり、他人の考えを拒絶する、あるいは他人の考えのままに流されるというような事も入ってくるかもしれません。「煩惱濁」は、貪りや瞋りといったところがますます盛んになる濁りです。そして「衆生濁」は、衆生としての質が低下する事と押さえられています。私はその濁りの中

に、先ほどお話した「根帯」が断絶させられていくという事もあるのではないかと思います。最後に「命濁」ですが、命が短小になるといわれますが、生きる意味が見失われていく、いのちの尊さが見失われるといっているように思います。

濁世の在りさま

そして私は、これらの五つの濁りが並列に並べられるのではなくて、劫濁という時代社会がそこに生きるものをして、見濁というものを呈させ、そして煩惱が唯一の価値となるような状況を生み、人と人との繋がりが断絶され、結果いのちそのものの価値が見失われていくというように展開があるのでないかと思っております。ここに人間の在り方と、世の在り方の繋がりの問題が出てくると思います。